

**越山若水**

2021.7.20

2017年夏に公開された中国伝説の映画がある。題名は「戦狼」――ウルフ・オブ・ウォー」。特殊部隊の元精鋭が欧州の軍団に襲撃された同胞を救出するアクション

映画である▼ハリウッドのスタッフを招いて制作した本格的な作品で「中国版ランボー」として注目された。日米などでも公開され観客動員数は1・6億人、興行収入は1000億円を突破。もちろん中国史上歴代トップの記録で、世界的にも54位にランクされる大ヒットだった▼この社会現象を由来として生まれた言葉が中国の「戦狼外交」である。折しも米中の二国間対立が高まり、外務省報道官や外交官らが強硬姿勢を誇示。攻撃的で挑発的な言動を繰り返すようになった。その後ろ盾には習近平国家主席が推進する「大国主義」がある▼共産党の創建100周年式典で習主席は、中国を刺激する外部勢力に「人民が血と肉で築き上げた鋼鉄の長城に頭をぶつけ血を流すだろう」と警告。その内容は映画「戦狼」の宣伝文句「どれだけ遠くにいようと、中国を侮辱する者は代償を支払う」と瓜二つだった▼南シナ海で権益拡大を狙う軍事行動、香港や台湾への強権介入、新疆ウイグル自治区の人権侵害などの専制的支配に、米バイデン政権は同盟国と連携し中国包囲網を築こうと算段する。中国第一を掲げる「戦狼外交」のままでは国際的な孤立は免れない。